

江差町鷗島沖の海揚げり遺物

佐藤雄生

一、はじめに

北海道松山郡江差町^{ひやまぐんえさしちょう}は、近世から近代にかけて、北前船交易とニシン漁で栄えた港町である（図1・写真1）。近世には、いわゆる松前三湊（松前・江差・箱館）の一つとして、旅人検めや移出入品に対する徴税などを取り仕切る沖口役所が置かれ、松前藩領における交易拠点の一つであった。また、商家であった横山家や旧中村家の住宅、関川家の別邸といった建築物が現存している。

従来、中・近世の江差については、『新羅之記録』、『福山秘府』といった松前藩の官選史書や、『東遊記』、『蝦夷日誌』といった紀行文、そして江差町内に残る『関川家文書』などの史資料を中心に語られてきた。また、昭和五〇年から同五六年にかけて江差町教育委員会が主体となり、慶応四年（一八六八）に江差沖で沈没した徳川脱走軍軍艦・開陽丸の海底遺跡調査が実施され、船体の一部が確認されるとともに、多数の遺物が引き揚げられている。しかし、江差の町屋に係わる中・近世考古資料の蓄積は極めて少なく、町内の伝世資料も一九世紀代のものが中心となっているため、文献史料との比較検討が十分に成されていない状況にあ

る。

筆者は、北海道における出土近世陶磁器の所在確認を進める過程で、未報告となっていた「江差町鷗島沖の海揚げり遺物」の重要性を認識し、江差町教育委員会の協力を得て借用・資料化するに至った。本稿は、若干の考察を加えて、その内容を報告するものである。なお、本資料は、旧檜山爾志郡役所（江差町郷土資料館）及び旧中村家住宅土蔵において保管・展示されている。

二、遺物引き揚げ地点と調査の経緯

江差市街地の西、約四〇〇mに位置する鷗島は、周囲二・六km、南北一km、島高平均二五m（最高二七m）、比較的平坦で、島の西側（沖側）は絶壁、岩礁になっており、北西には千畳敷と呼ばれる平磯が広がっている（北海道開発局函館開発建設部江差港湾建設事務所編一九九六）。江差湊は、防波堤となる鷗島と、それに向かって突出する津花岬によって挟まれており、水深も深く、荷揚げ場となりうる前浜を有しており、良好な港湾としての要素を有していた。（江差町史編集室一九八

二)。享保二年（一七一七）に成立した『松前蝦夷記』には「江差村澗懸能候よし 北風にはあしき由」とあるように、冬の北風に弱い港湾形状ではあったが、それを除けば船舶の停泊に適していた。宝暦年間（一七五一～一七六三）に作成された『松前屏風江差湊』（写真2・3）には、鷗島の背後に船舶が並んで停泊する様子が描かれ、一九世紀中葉に描かれた『辨天嶋之圖』（写真4）には、鷗島付近に赤字で水深が記されている。また、明治時代中頃の古写真（写真5）には、鷗島と津花岬の間に舳先を並べて多数の船舶が停泊する様子が写されている。これらの資料から、鷗島付近は停泊地として利用されていたことが判る。

この鷗島から江差港の堤防へ向かい約一〇〇mの地点には、北前船が沈んでいるとの情報が以前からあった（昭和五二年六月二一日付朝日新聞記事）。昭和五二年当時、開陽丸の海底遺跡発掘調査を行っていた江差町教育委員会を主体とする調査チームは、この情報をもとに、ダイバーによる確認調査を実施し、海底から遺物を引き揚げるに至った。

三、遺物の内容

本資料の内訳は、陶器三二点、磁器一〇七点、土器二点、瓦五点、ガラス二点、金属一点、古銭六点、合計一五五点である（表1）。以下にその内容を記す。

陶磁器では、珠洲焼の播鉢（No.104）が最も古く、一四世紀末葉～一五世紀中葉（小野編年V期）に相当するものとみられる。続く一五世紀後半～一六世紀までの陶磁器は含まれておらず、一七世紀前半～一八世紀

前半の肥前産陶磁器がわずかにみられる。すなわち、呉器手碗（No.6）、砂目積み灰釉小皿（No.50）、内野山窯の銅緑釉小皿（No.51・52）、である。遺物量が増加するのは一八世紀後半であり、くらわんか手の碗（No.7・10）、筒型碗（No.11・12）、広東碗（No.13）、蛇ノ目釉剥ぎの小皿（No.52・58）、くらわんか手の深皿（No.61・66）といった肥前産陶磁器の日用雑器が主体となっている。一九世前葉～中葉には多様な産地・器種がみられる。肥前産及び肥前系磁器では、小坏（No.1）、小碗（No.14・18・20・22・24・26・28・30・32）、碗蓋（No.33・36）、深皿（No.67・69・85）、中皿（No.86・89）、徳利（No.113・120）、銚子（No.132）がある。瀬戸・美濃産磁器では、小坏（No.2・3）、小碗（No.19・21・25・27・29・31）、碗蓋（No.37）がある。明治以降の製品は、肥前産及び肥前系磁器のコバルト染付による型紙摺り製品（No.38・42・44・90・93・97）や、銅版転写の製品（No.101・102）がみられ、瀬戸・美濃産でも同じくコバルト染付（No.43・94・96）や、銅版転写（No.46・100）の製品がある。

陶器では、萩産とみられる小坏（No.4）、上野・高取系の中甕（No.111・112）、越後産焼酎徳利（No.121・128）、関西系の土瓶（No.137）、同じく関西系の灯明皿（No.139）がある。播鉢は一八世紀代の須佐唐津産（No.105）、一九世紀代の肥前産（No.107）、一九世紀前葉～中葉の上野・高取系（No.106・108）及び瀬戸・美濃産（No.109）がみられる。

土器では、精緻な胎土を用いた湯通し（No.140）や、匣鉢（No.141）とみられるものがある。瓦は燻瓦（No.142）と越前瓦（No.143・146）が確認できる。ガラス製品は近代以降の蓋（No.147）と瓶の口縁部（No.148）がある。金属製品は一八世紀後半とみられる煙管の雁首がある。古銭は、中国北

宋の「咸平元寶」(No.150) 一枚、中国明朝の「洪武通寶」(No.151) 一枚、古寛永通寶 (No.152・153) 二枚、新寛永通寶 (No.154・155) 二枚の合計六枚である。なお、洪武通寶 (No.151) には「一銭」の裏文字がみられ、新寛永通寶 (No.154) の背面には「二十一波」の文様がみられる。

四、遺物の性格

海揚げり陶磁器の性格は、野上建紀氏により①積荷として船に積み込まれた商品、②容器(内容物が商品で、陶磁器は商品の一部)、③船上の使用品、④陸上の使用品という四つに分類されている(野上二〇一一)。
鷗島は天然の防波堤であり、付近は船舶の停泊に適していたが、大時化による破船・沈船や、暴風雨による町屋の流失・倒壊がたびたび発生している。また、寛保元年(一七四一)の渡島大島噴火に伴う大津波の際、町屋は甚大な被害を受け(江差町史編集室一九八三)、引き波により様々なものが海底に沈んだと考えられる。これらのことから、陶磁器を始めとする鷗島沖の海揚げり遺物は、野上分類①④の全てに該当する可能性がある。ただし、遺物の多くはローリングによる磨滅が極めて少なく、当該地点に沈んでからあまり動きが無かったと考えられるため、破損した商品が船上から海に投棄されたことや、積荷の商品あるいは船上での使用品が沈没・流出したことなどが想定される。すなわち、本資料の主体は野上分類①③と推測される。

なお、使用されていたことが明らかな個体は、焼き継ぎ痕をもつ一九世紀中葉の青磁染付輪花皿 (No.86) と、高台内に「四十二マイ」の墨書

をもつ明治期の深皿 (No.92) のみで、これらは江差の町屋で使用されたもの、すなわち野上分類④に比定できる。

五、おわりに

「江差」という地名は、中世期の資料中には見ることができず、正保三年(一六四六)に成立したとされる『新羅之記録』においても、中世期の記事にみられる地名の中で現在の江差町域内に含まれるものは「泊」のみである(宮原二〇〇六)。一方、江差町鷗島沖の海揚げり遺物に含まれる咸平元寶・洪武通寶、一四世紀末葉～一五世紀中葉の珠洲焼播鉢といった中世遺物は、記録ではみられない和人集落が、中世の江差に存在していたことを示すものである。

近世に至って、「えさし」という名は、弘前藩の官撰史書である『津軽一統志』において登場する。寛文九年(一六六九)シャクシャインの戦いに関連する記事で、「えさし」が鯰取場として名を知られるようになり、蝦夷地や本州から船が来ているというものである(宮原前掲)。
加えて、延宝六年(一六七八)に、上ノ国にあった檜山番所が江差へ移設され、元禄期(一六八八～一七〇三)に西蝦夷地への追鯰漁が許可されたことで、江差は名実ともに西在の拠点となった。これらを反映するように、本資料に含まれる一七世紀前半の遺物は、肥前産灰釉小皿のみであったものが、一七世紀後半～一八世紀前半になると、肥前産銅緑釉陶器皿や見込蛇ノ目釉剥ぎ磁器皿など、遺物量の増加がみられる。

『松前屏風江差湊』が描かれた一八世紀後半には、鯰漁が盛行を迎え、

買積船の入津などもあいまって経済活動はより活発となる。本資料における当該期の遺物量はさらに増加し、くらわんか手の製品を中心とした肥前産磁器の寡占状態となる。一九世紀中葉の肥前・肥前系深皿（膽皿）、肥前・肥前系笹絵徳利・越後産徳利、上野・高取系中甕の組み合わせは「幕末蝦夷地3点セット」として、北海道内の幕末の遺跡に共通する器種構成（関根・佐藤二〇〇九）であるが、本資料においてもこれらを確認することができる。明治三〇年代には北前船の運行が終わりを迎え、鯉が不漁となり、大正期には鯉の群来が途絶える。本資料の遺物が二〇世紀前葉を境に激減することは、こうした江差経済の低迷を反映したものと考えられる。

以上のように、江差町・鵜島沖の海上がり遺物は、江差経済の盛衰を読み取ることができる貴重な資料といえよう。なお、開陽丸遺跡の未報告資料に、一七世紀後半～一八前半の肥前産陶胎染付碗や、明治期の型紙摺り製品など、開陽丸に帰属し得ない年代のものが複数みられる。また、江差町茂尻C遺跡の未報告資料には、一九世紀前葉～中葉の陶磁器が多数確認できる。今後これらの資料化を行い、考古資料からみた江差の実像を精査してゆく必要がある。

本稿の作成にあたり、次の各氏にお世話になりました。末筆ではありますが、ご芳名を記して深く感謝申し上げます。

江差町教育委員会 宮原 浩、弘前大学教授 関根達人、日本海域水中考古学会 佐々木達夫、金沢大学准教授 佐々木花江、長崎大学准教授 野上建紀、函館工業高等専門学教授 中村和之、上ノ国町教育委員会 塚田直哉、弘前大学国史研究会 佐藤郁穂（順不同敬称略）

〔参考文献〕

- ・松下 亘・氏家等・笹木義友 一九七八 「焼酎徳利について」『北海道開拓記念館研究年報6』
- ・江差町史編集室 一九八二 『江差町史 第五巻通説一』
- ・江差町史編集室 一九八三 『江差町史 第六巻通説二』
- ・吉岡康暢 一九九四 『中世須恵器の研究』
- ・北海道開発局函館開発建設部江差港湾建設事務所 編 一九九六 『江差港沿革史』
- ・江差町史編集室 一九九七 『江差町史 第八巻年表』
- ・九州近世陶磁学会 二〇〇〇 『九州陶磁の編年』―九州近世陶磁学会10周年―
- ・江戸考古学研究会 二〇〇一 『図説 江戸考古学研究事典』
- ・永井久美男 二〇〇二 『新版 中世出土銭の分類図版』
- ・宮原 浩 二〇〇六 「日本海交流の中の江差」『日本海域歴史体系』第五巻近世篇Ⅱ 原 直史・大橋康二編
- ・関根達人・佐藤雄生 二〇〇九 「出土近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』第28号 日本考古学協会
- ・野上建紀 二〇一一 「海底・海岸発見の肥前陶磁―海揚げりの陶磁器の特質について―」『考古学と陶磁史学』佐々木達夫先生退職記念論文集 金沢大学考古学研究室
- ・関根達人 編 二〇一二 『北海道渡島半島における戦国城館跡の研究』―北斗市矢不來館跡の発掘調査報告書―
- （さとう・ゆうき 松前町教育委員会 文化社会教育課主任学芸員）

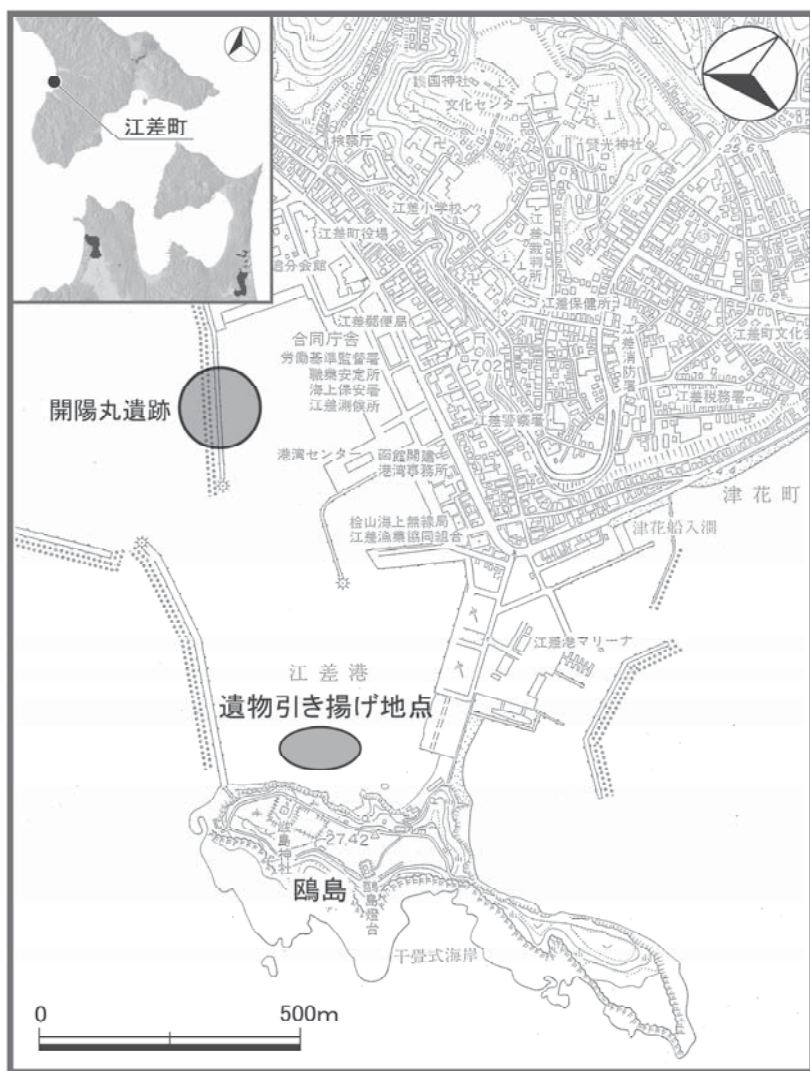


図1 江差町鷗島沖の遺物引き揚げ地点



写真1 江差市街地航空写真（江差町教育委員会提供）



写真2 松前屏風江差湊（市立函館博物館提供）

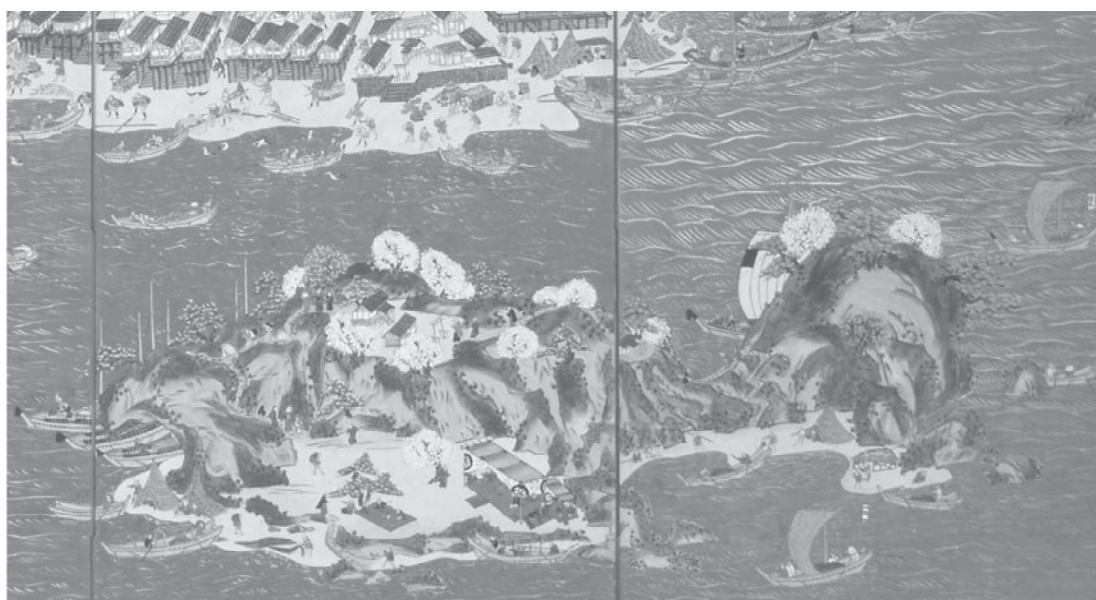


写真3 松前屏風江差湊 鷗島部分（市立函館博物館提供）



写真4 辨天鳴之圖
（江差町教育委員会提供）



写真5 明治時代中頃の江差湊
（江差町教育委員会提供）

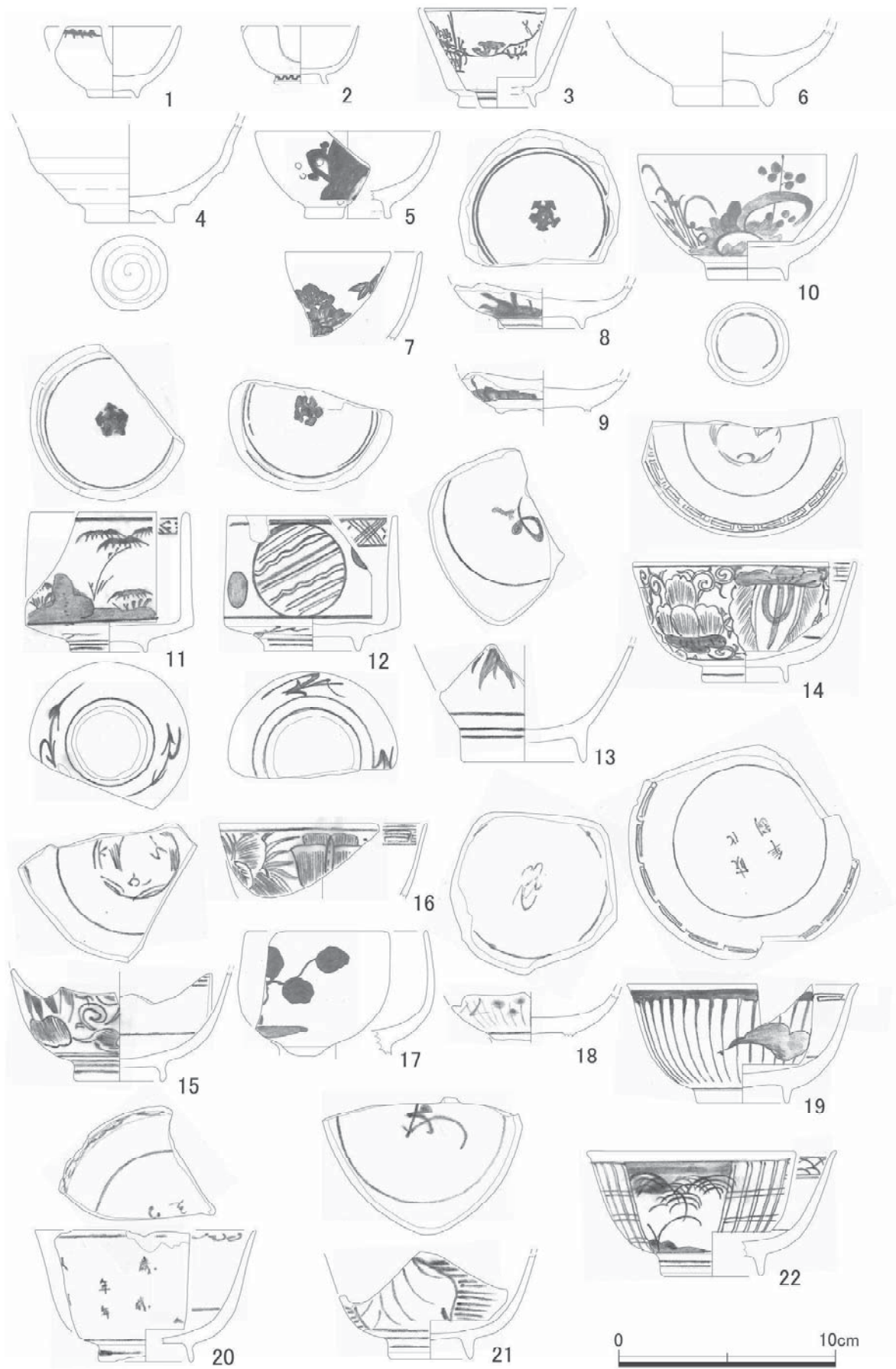


図2 鷗島沖の海揚げり遺物1

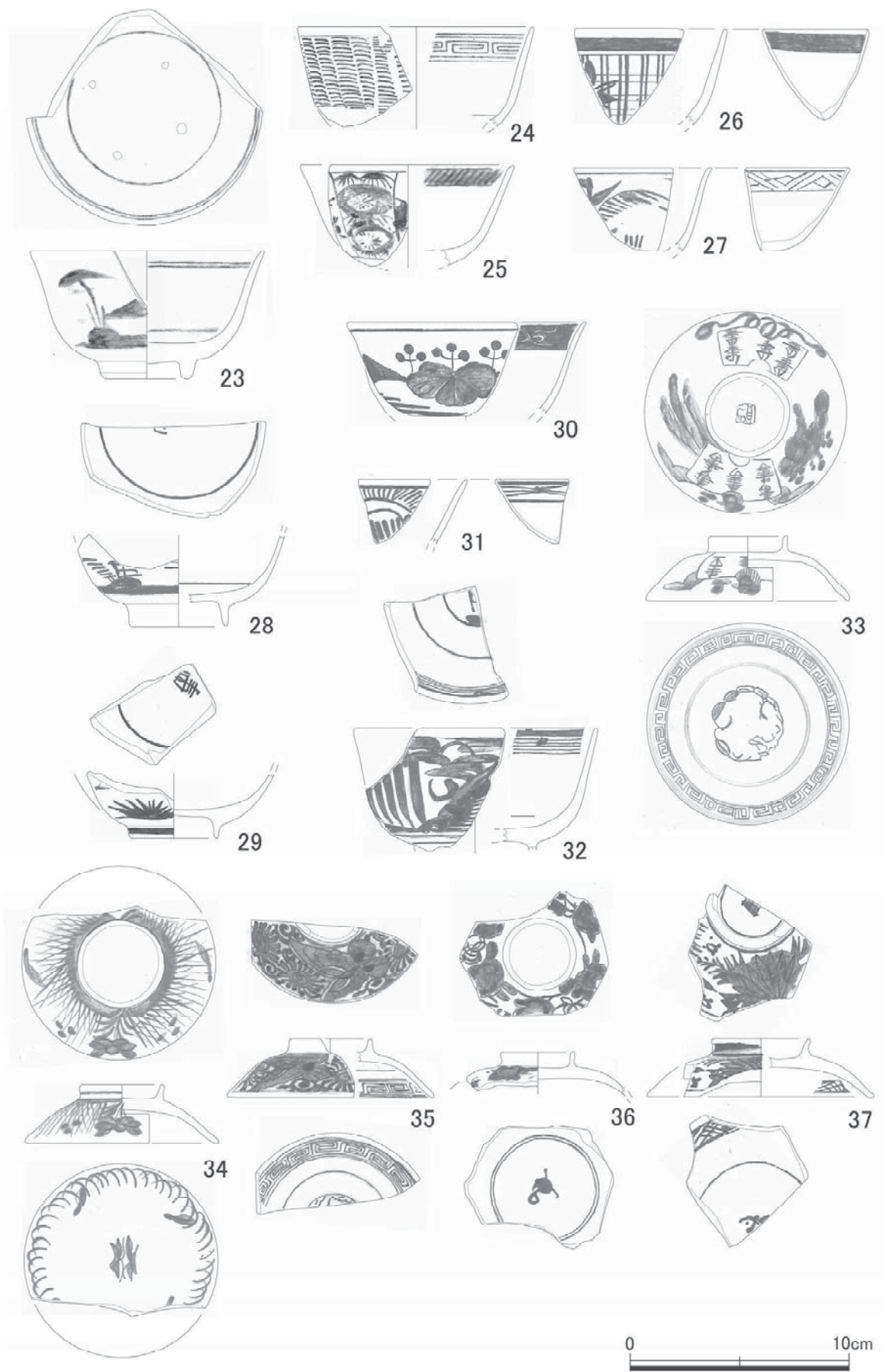


図3 鷗島沖の海揚げり遺物2

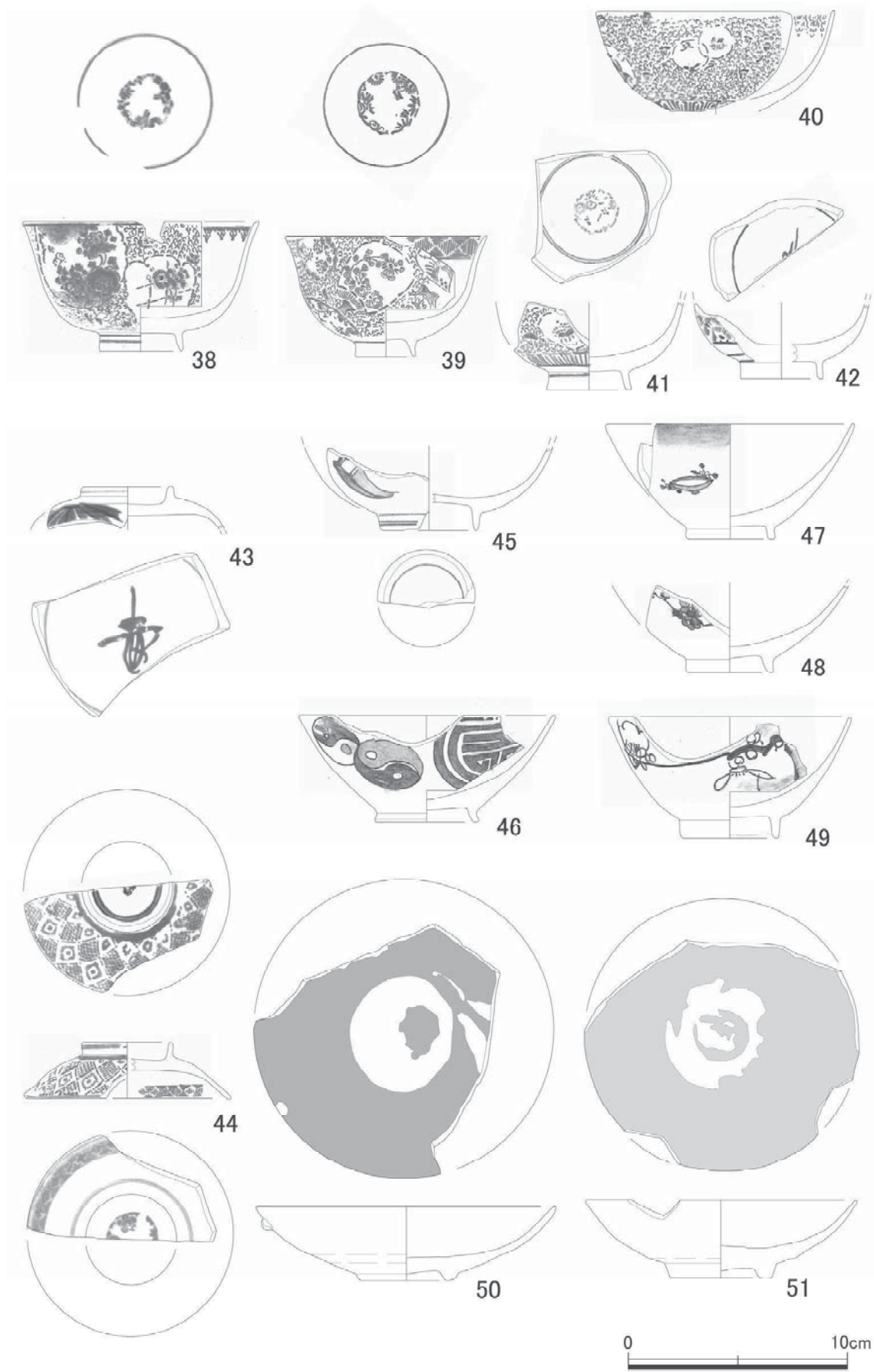


図4 鷗島沖の海揚げり遺物3

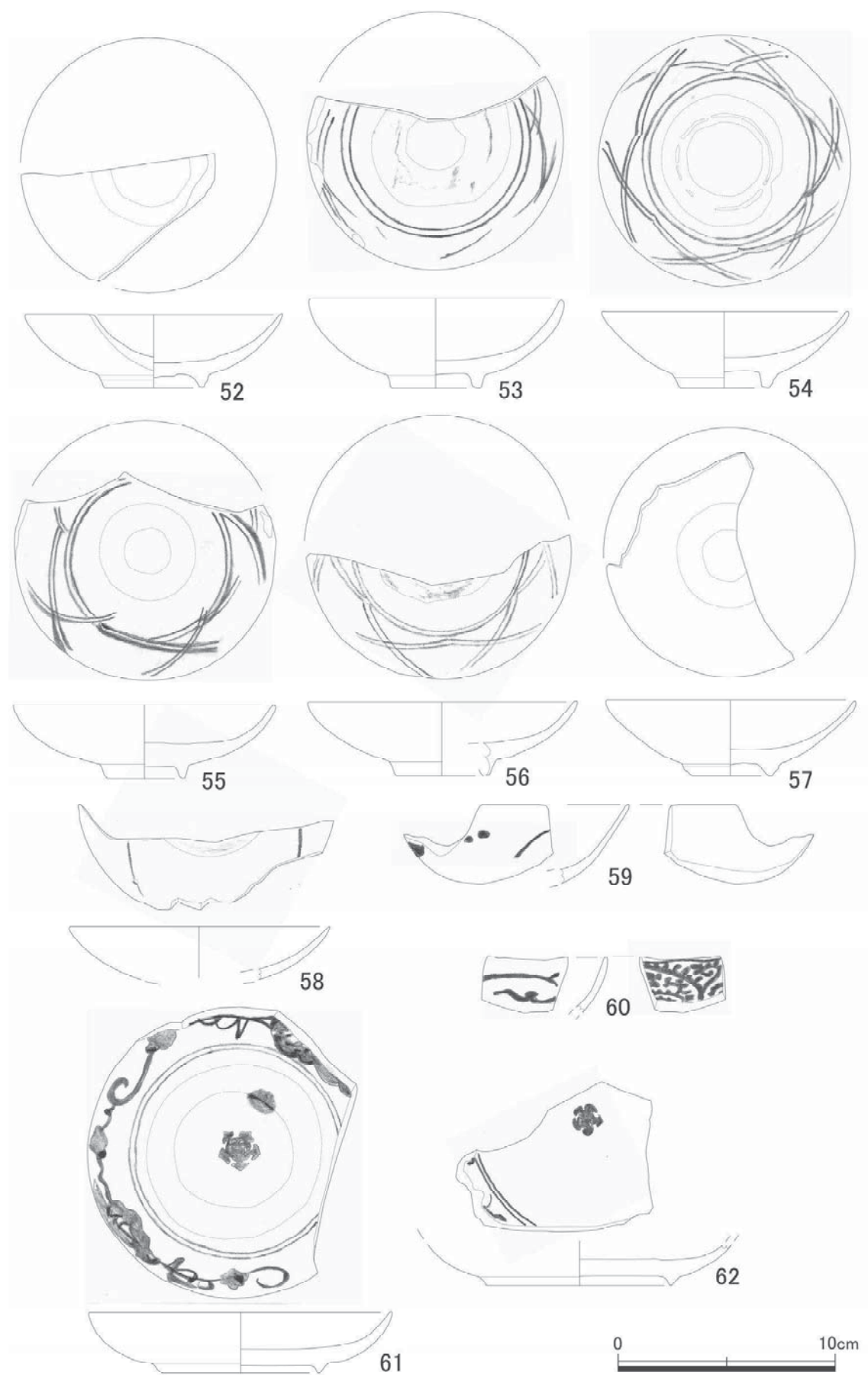


図5 鷗島沖の海揚げり遺物4

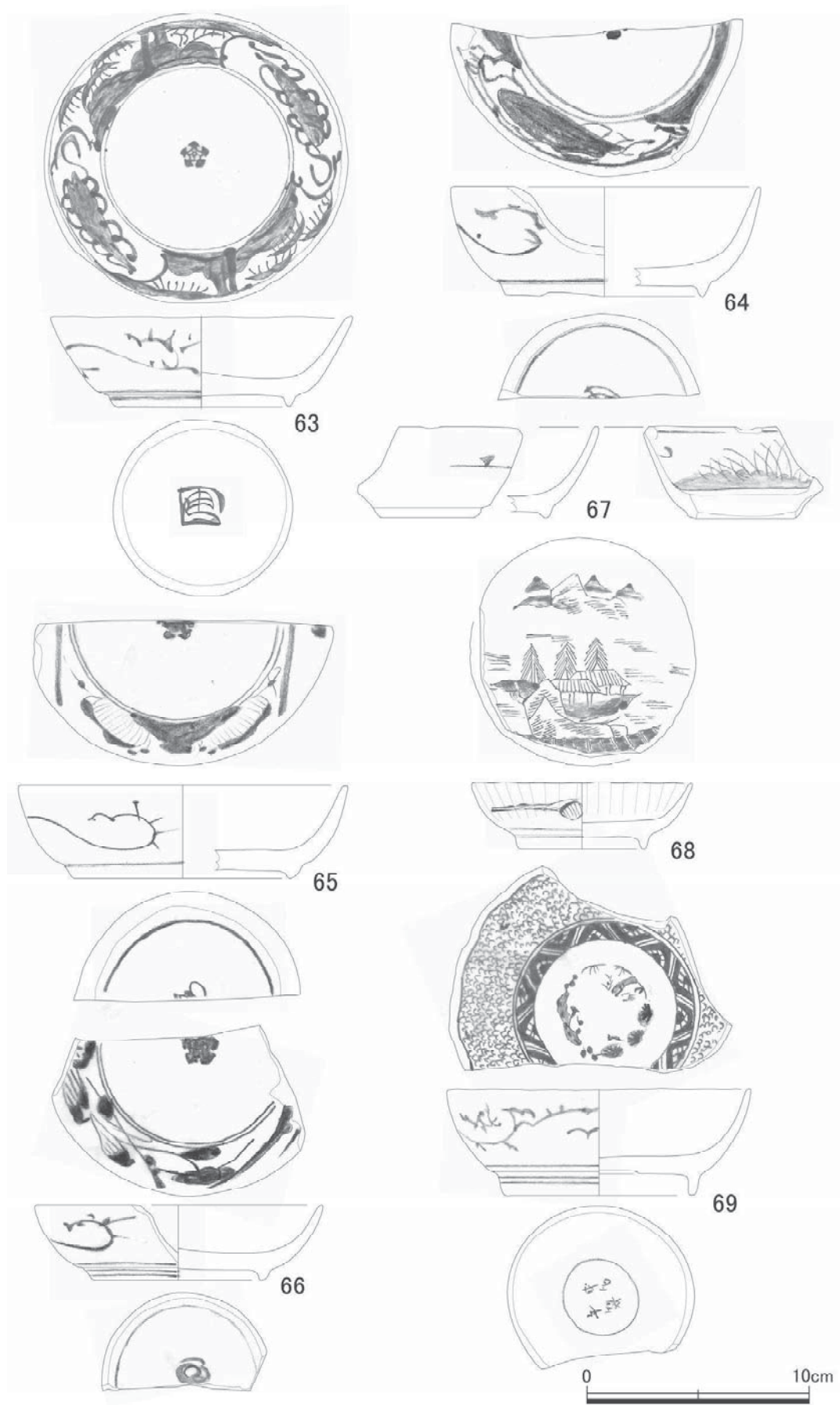


図6 鷗島沖の海揚げり遺物5

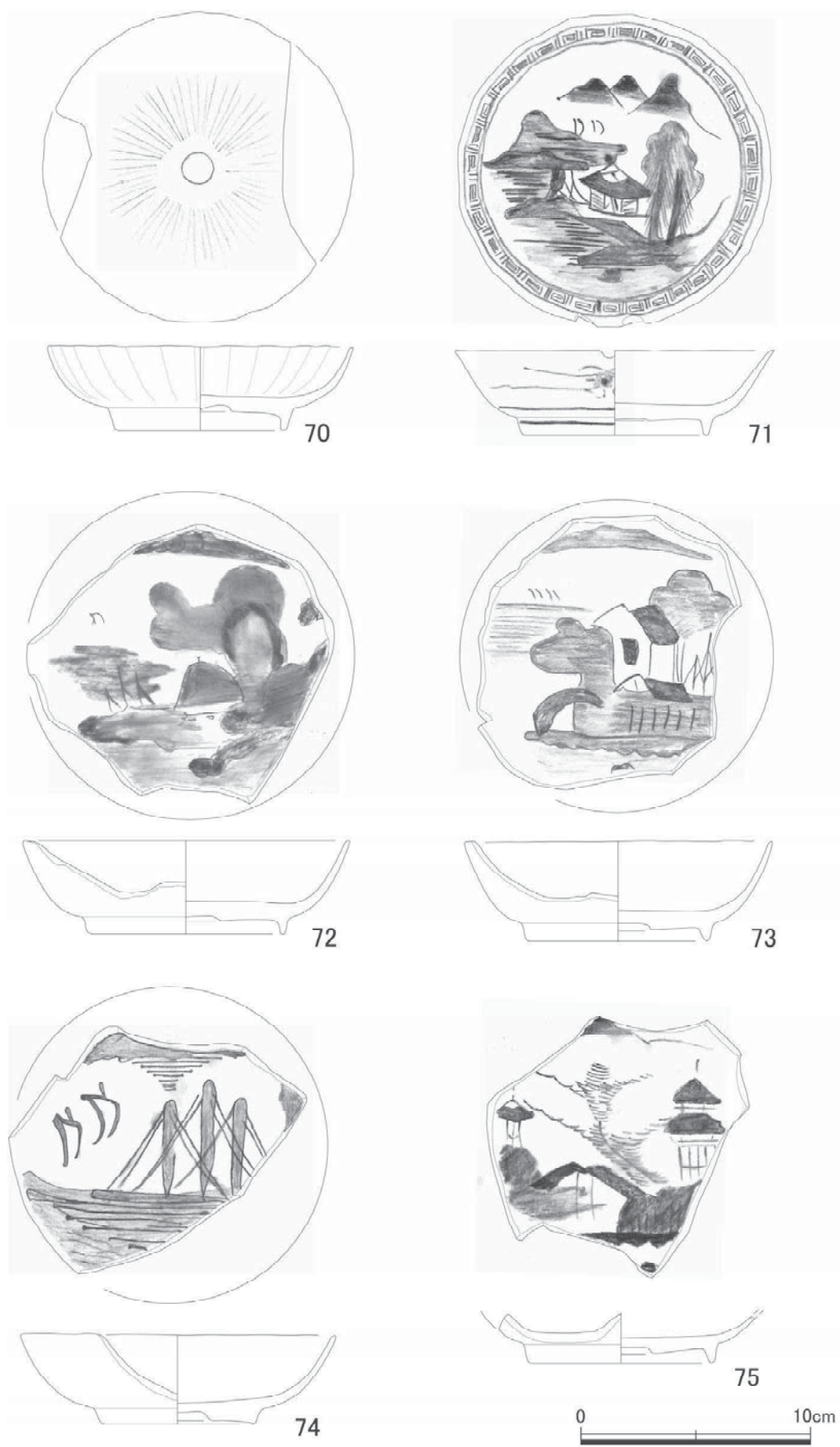


図7 鷗島沖の海揚げり遺物6

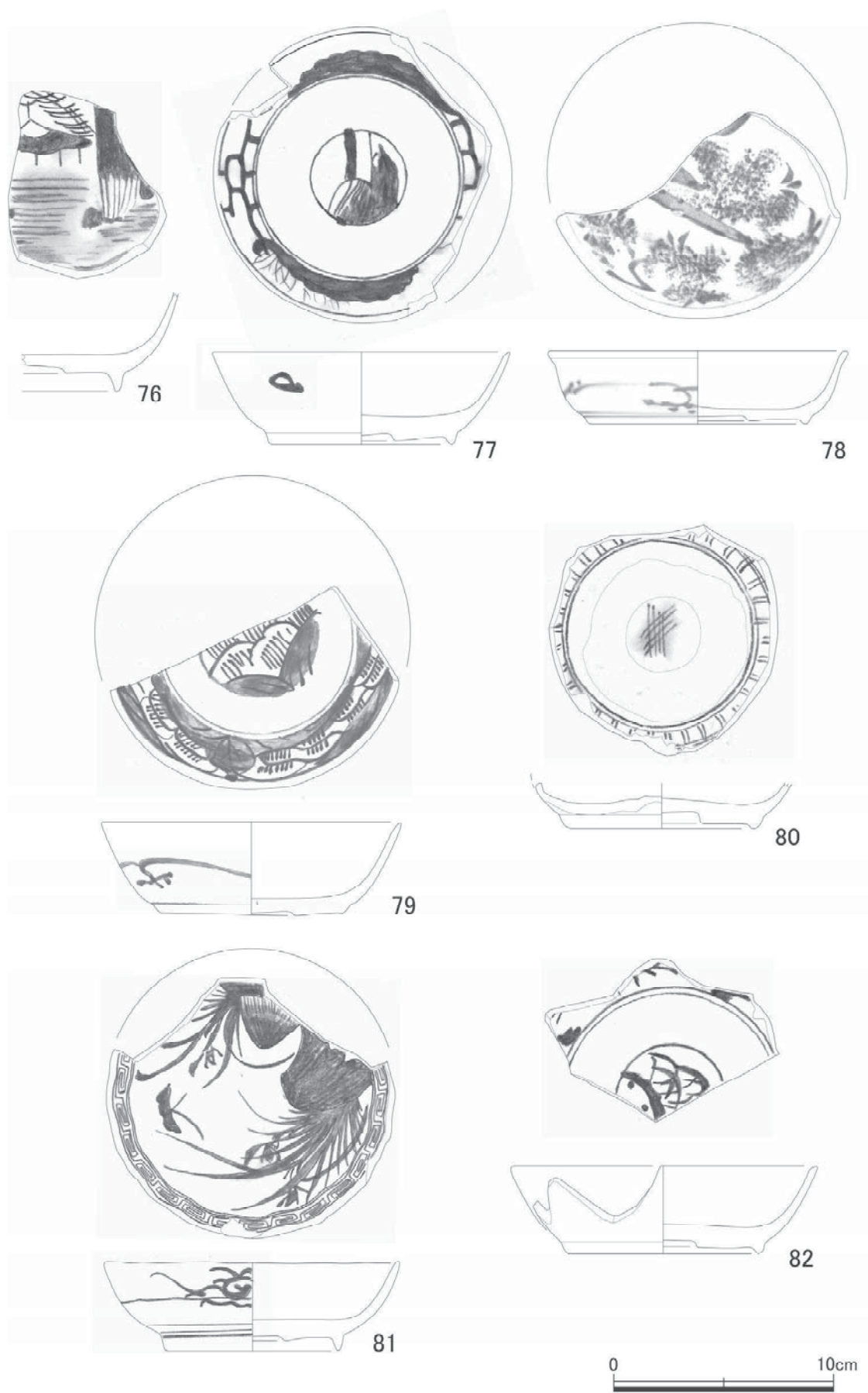


図8 鷗島沖の海揚げり遺物7

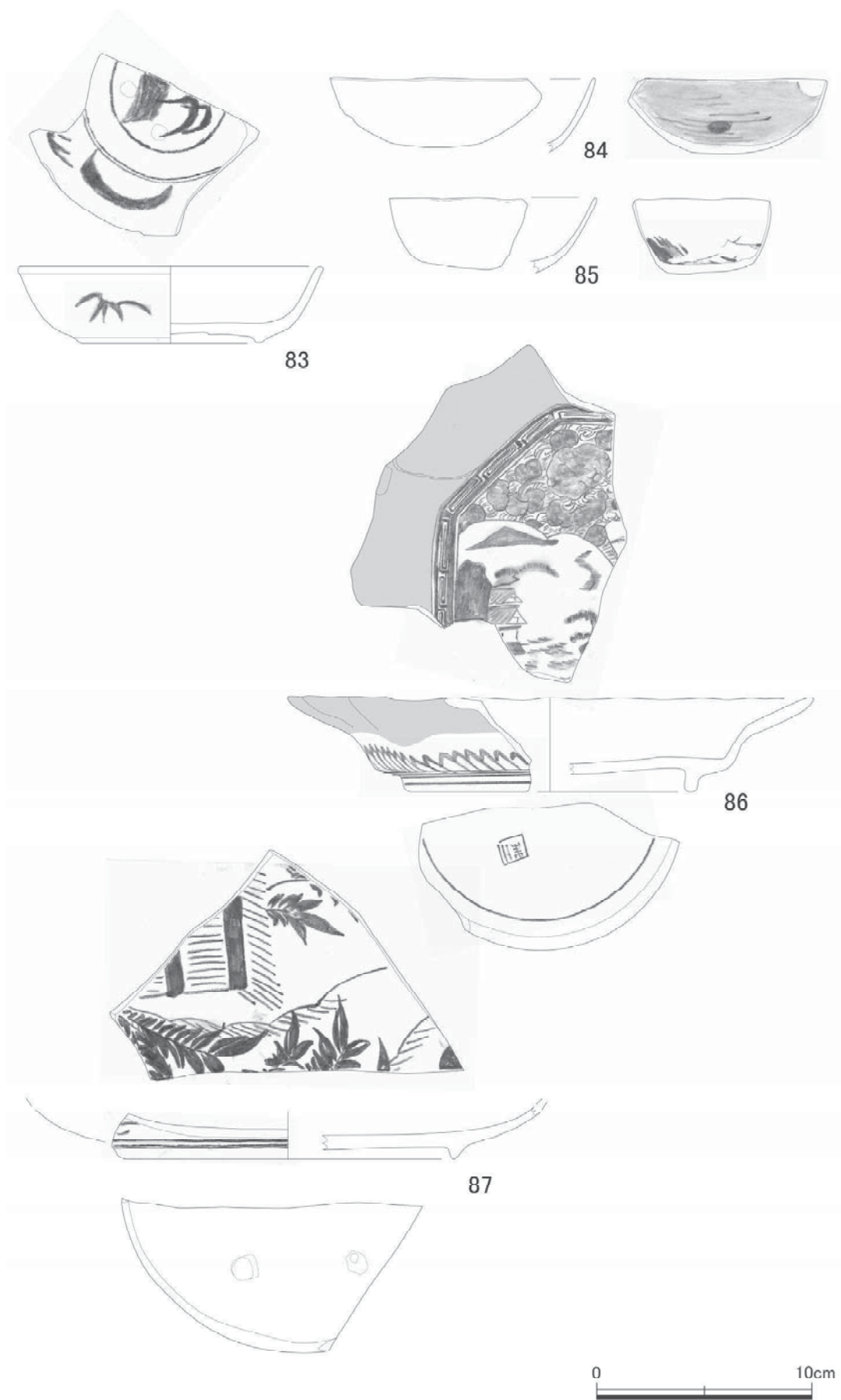


図9 鷗島沖の海揚げり遺物 8

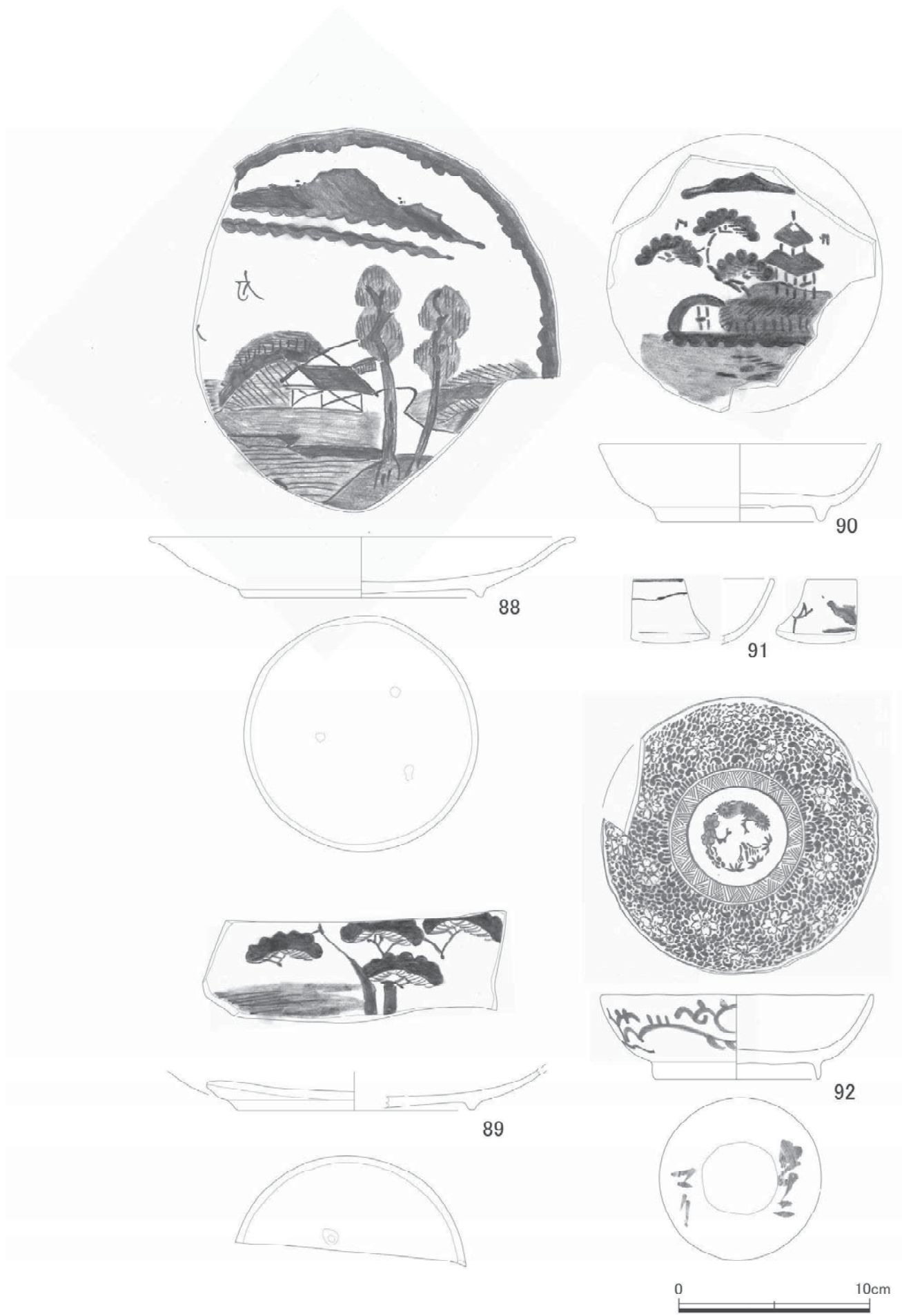


図10 鷗島沖の海揚げり遺物 9

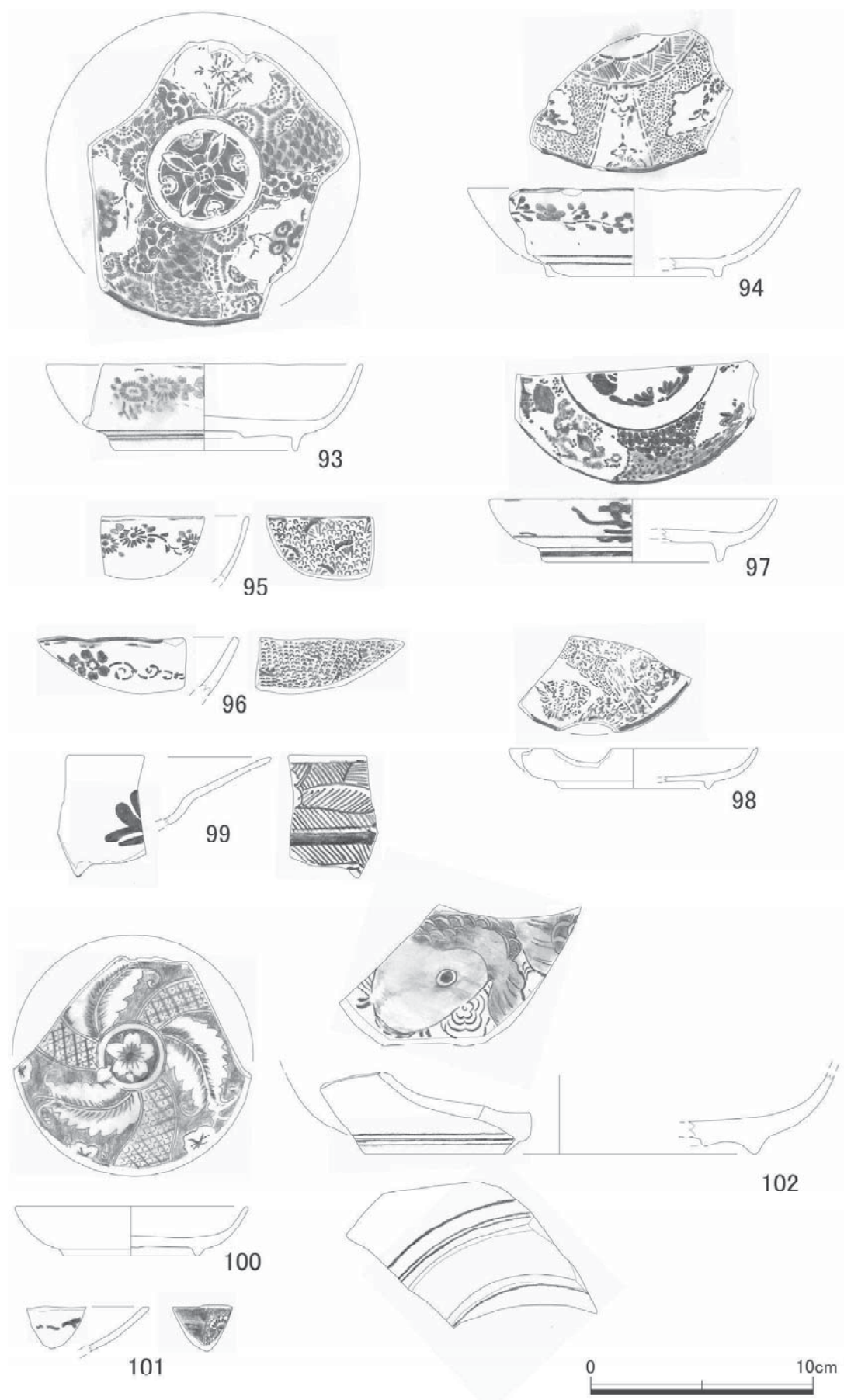


図11 鷗島沖の海揚げり遺物10

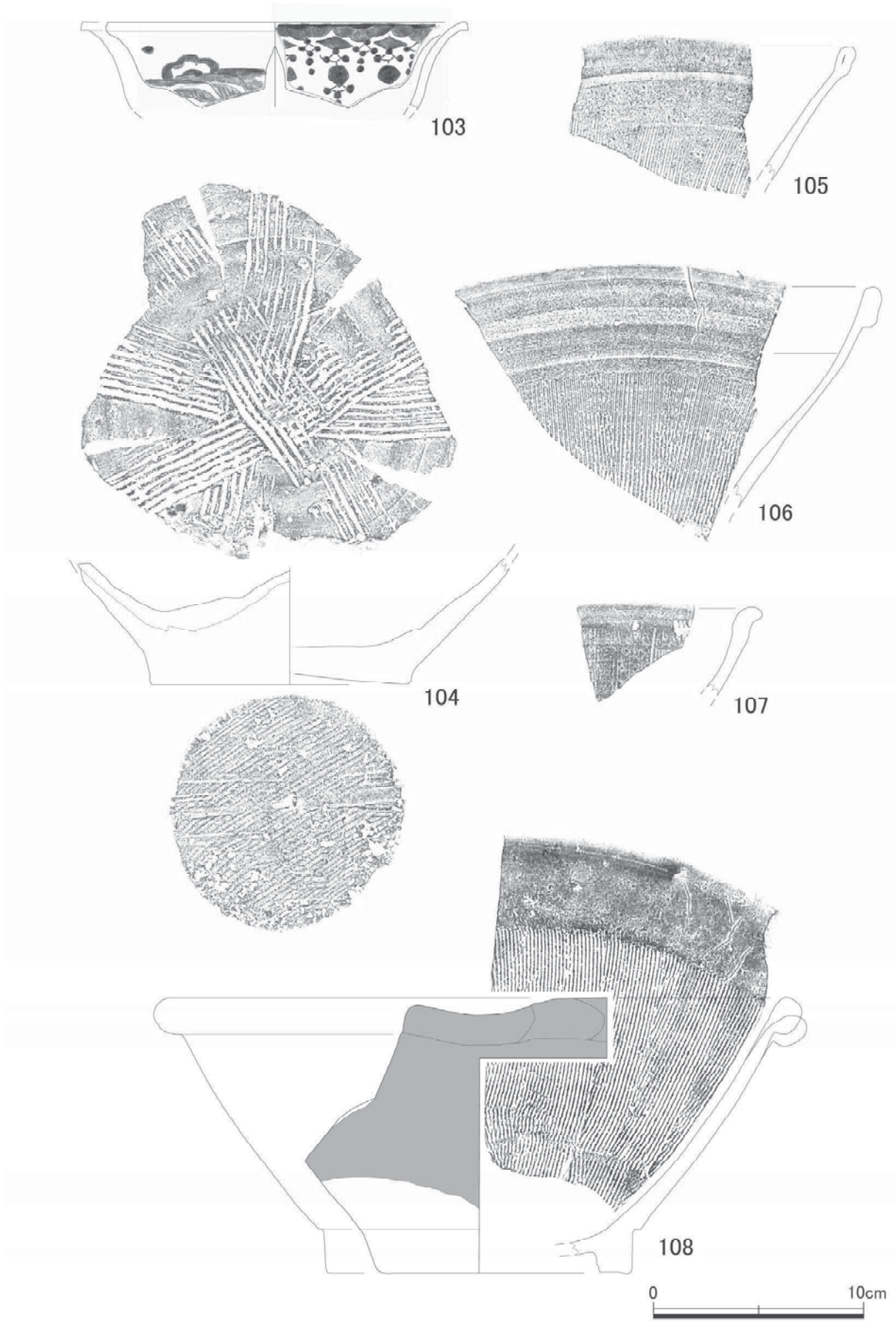


図12 鷗島沖の海揚げり遺物11

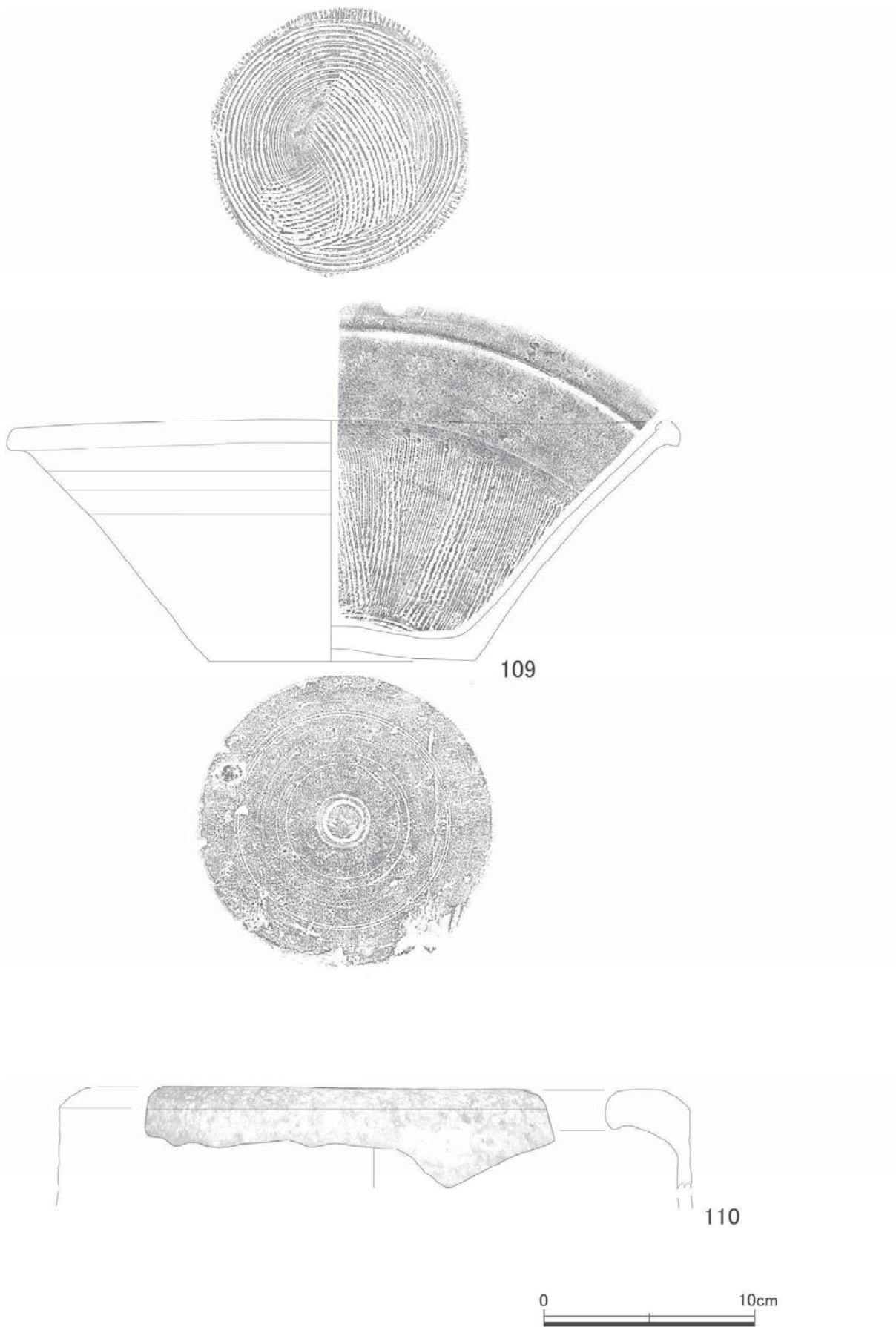


図13 鷗島沖の海揚げり遺物12

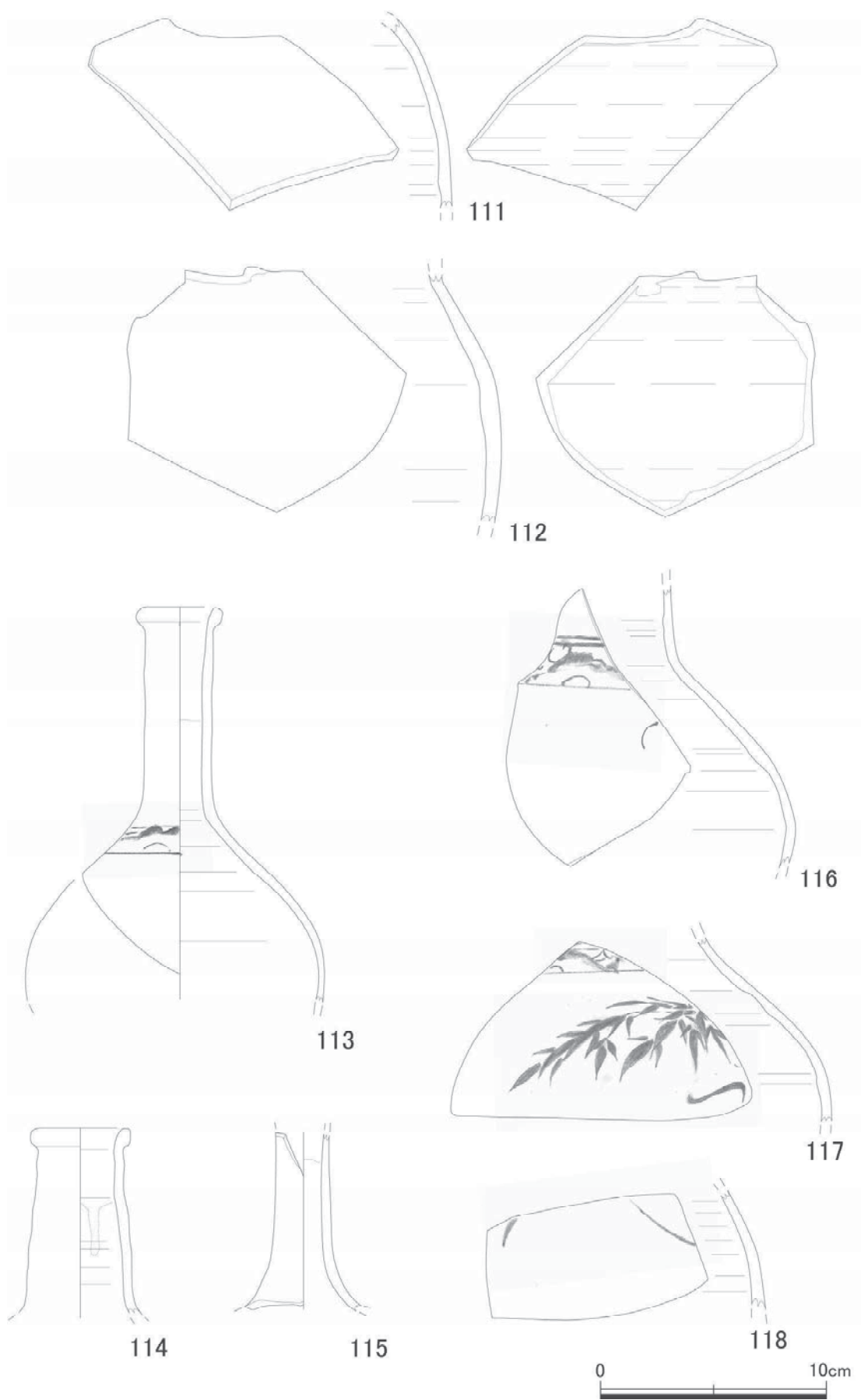


図14 鷗島沖の海揚げり遺物13

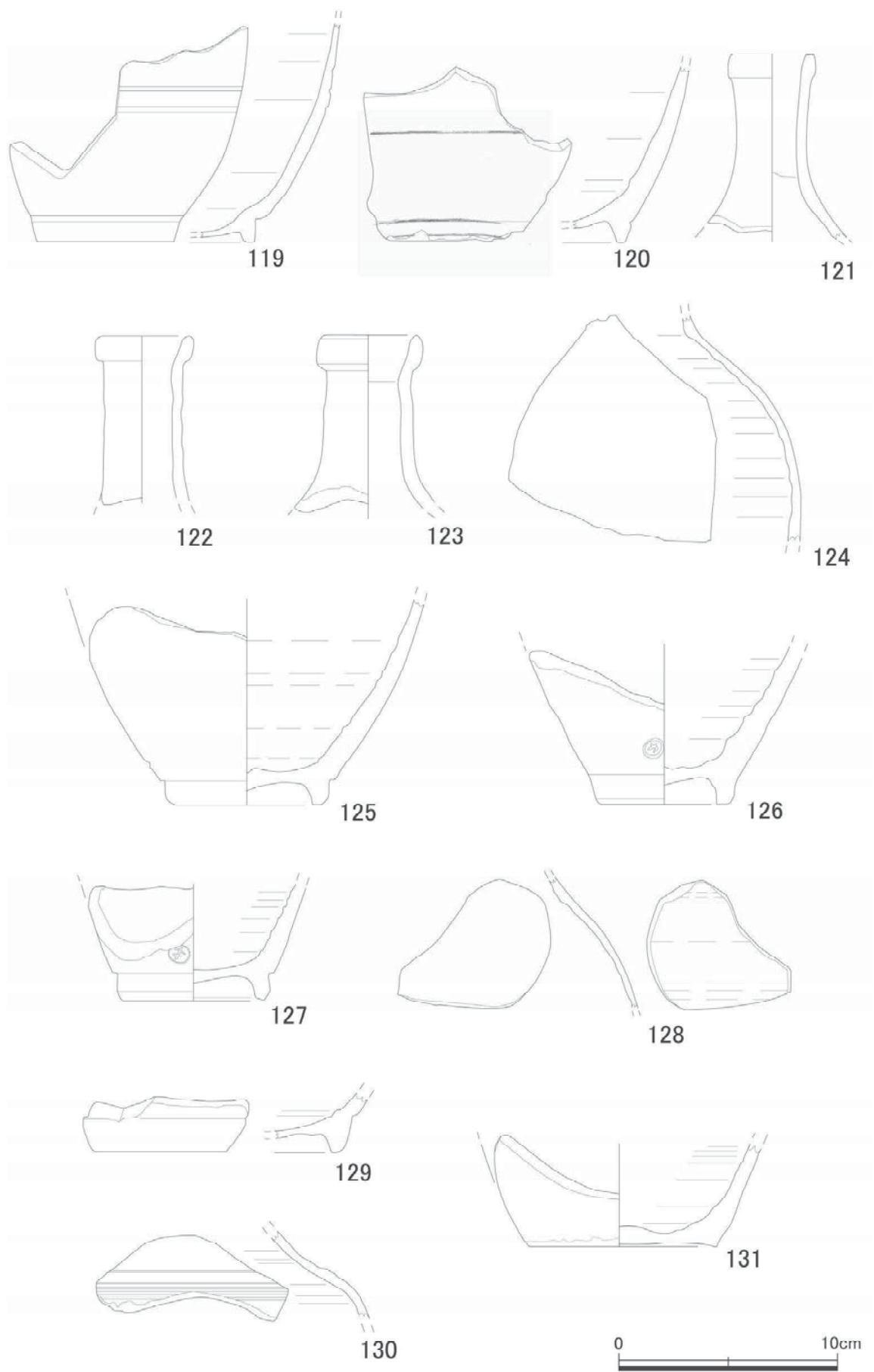


図15 鷗島沖の海揚げり遺物14

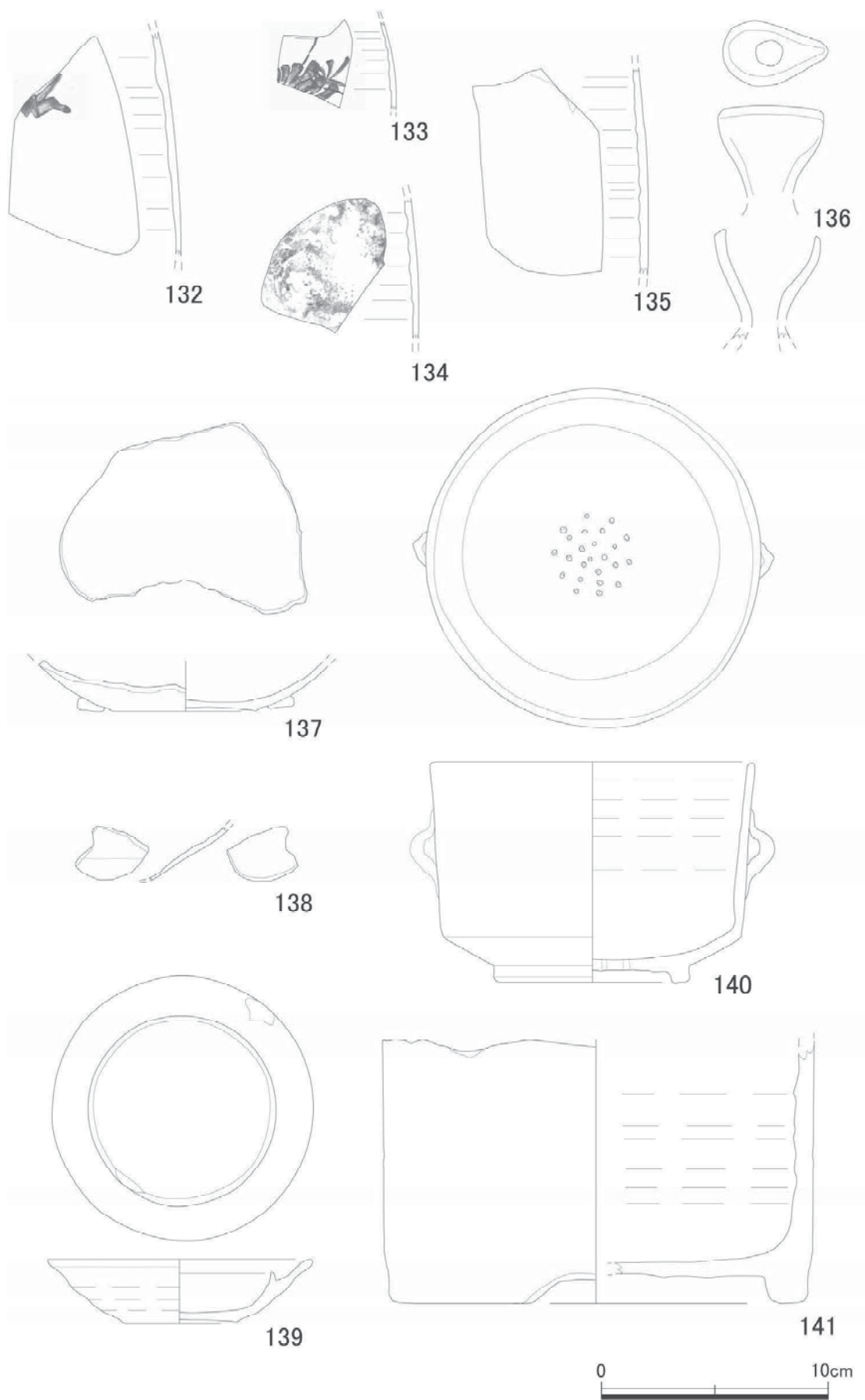


図16 鷗島沖の海揚げり遺物15

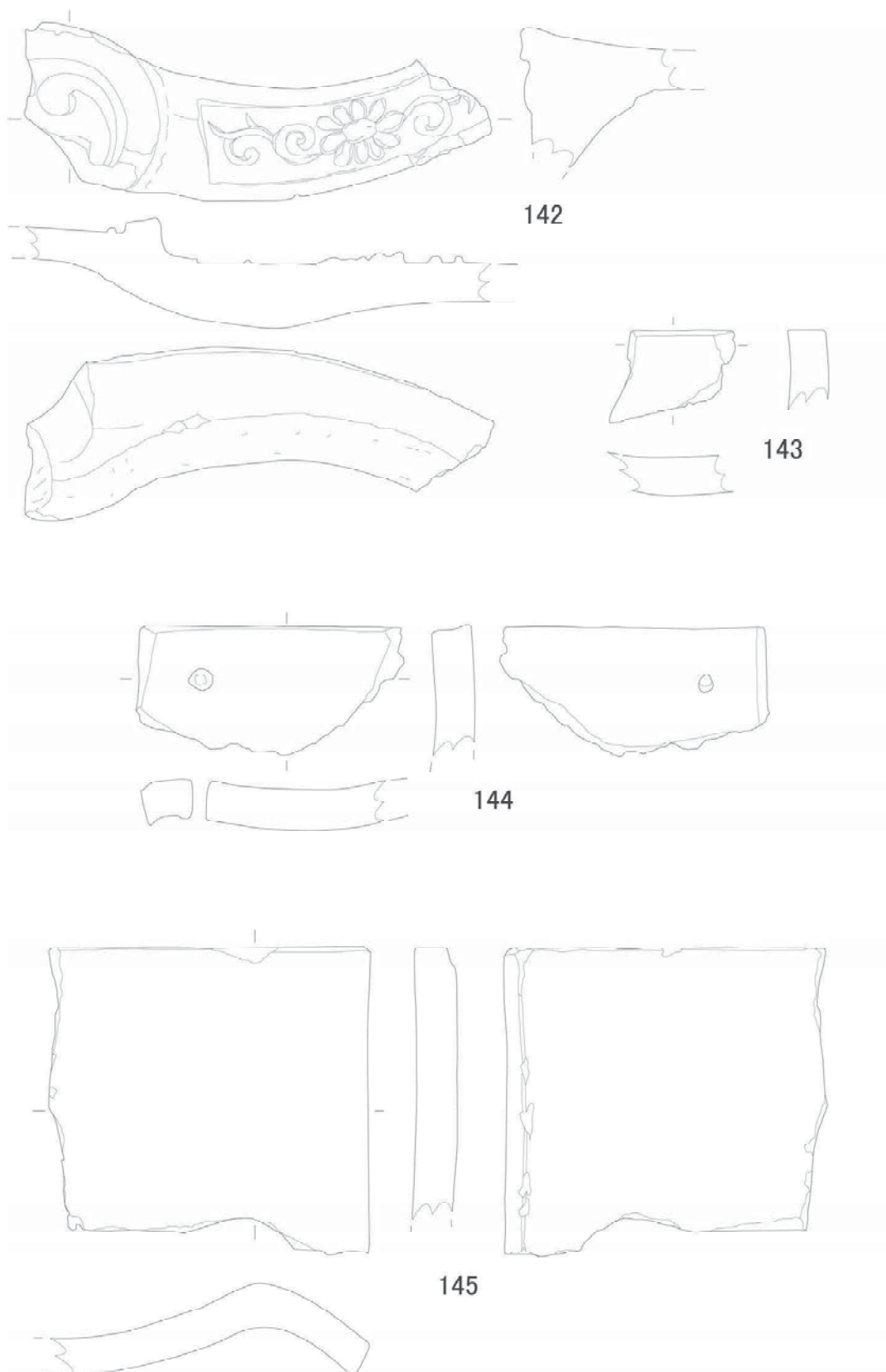


図17 鷗島沖の海揚げり遺物16

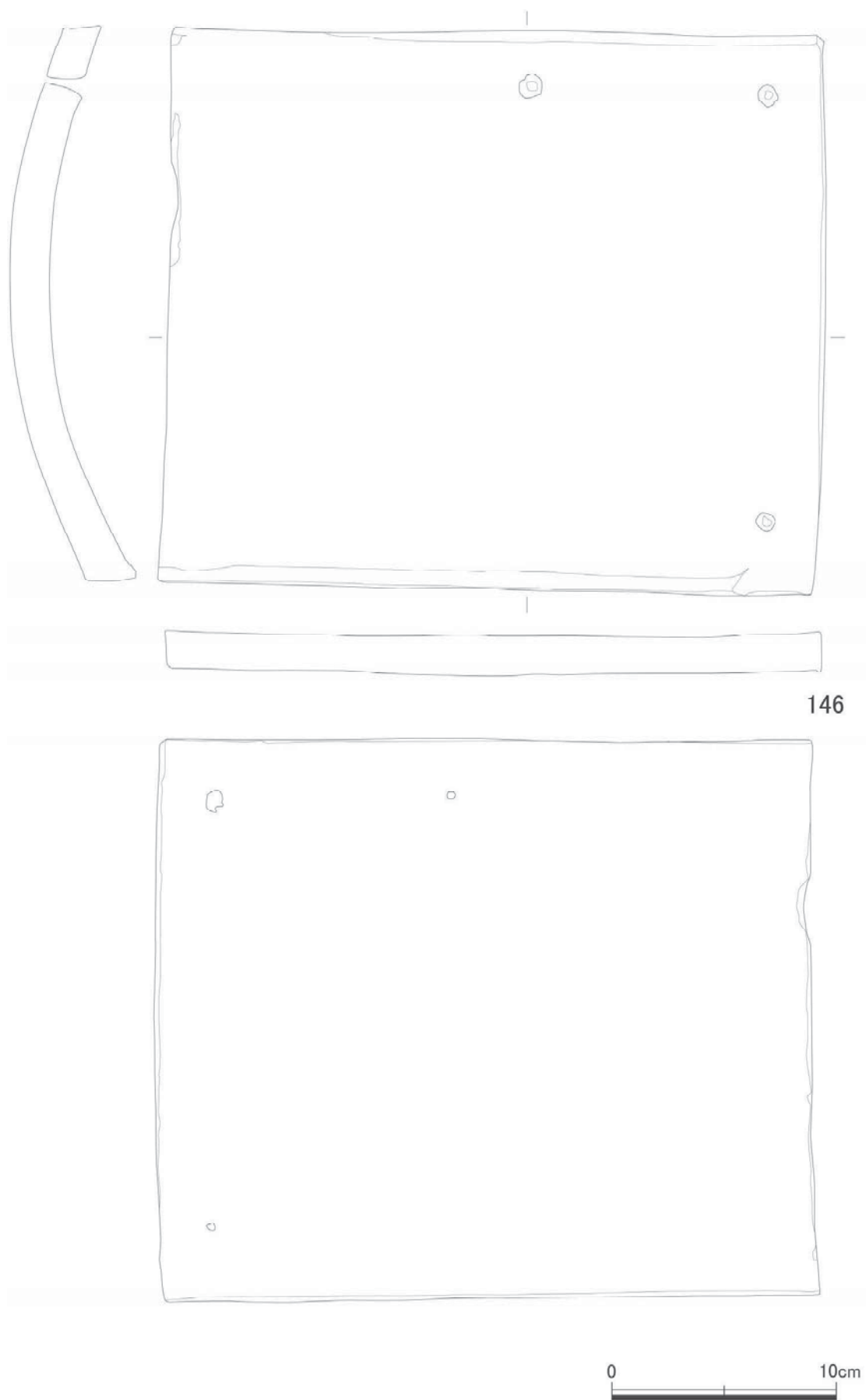


図18 鷗島沖の海揚げり遺物17

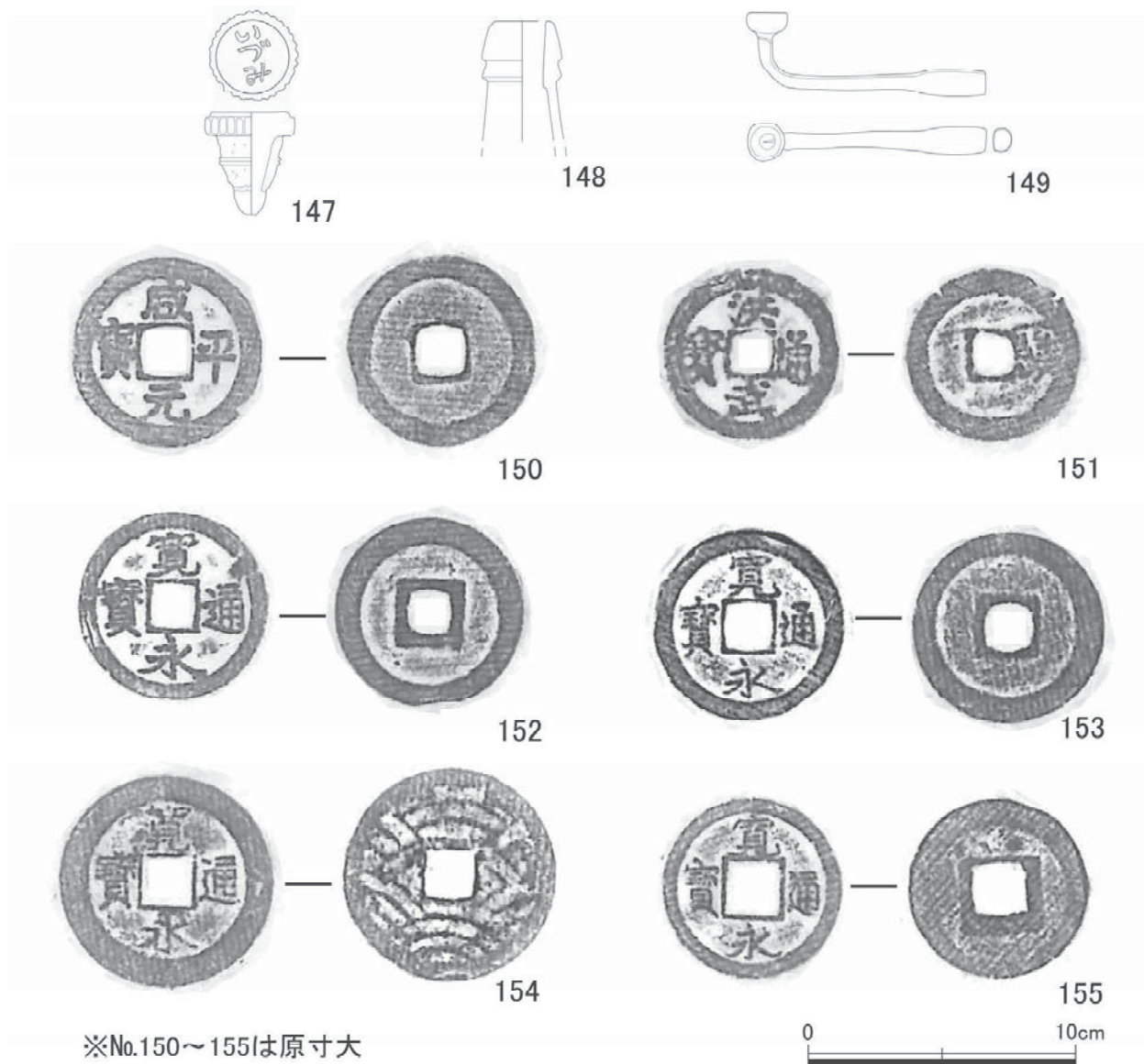


図19 鷗島沖の海揚がり遺物18

表 1 鷗島沖の海揚がり遺物 集計表

陶器

産地\器種	小坏	小碗	小皿	插鉢	甕	徳利	銚子	土瓶	灯明皿	合計
珠洲				1						1
肥前	1	1	3	1						6
瀬戸・美濃				1						1
須佐唐津				1						1
上野・高取系				2	2					4
越後						8				8
関西系								1	1	2
萩		1								1
不明	1				1	3	2	1		8
合計	2	2	3	6	3	11	2	2	1	32

磁器

産地\器種	小坏	小碗	碗蓋	小皿	深皿	中皿	角皿	小鉢	徳利	銚子	合計
肥前・肥前系	1	26	4	9	29	5	1	1	8	3	87
瀬戸・美濃	2	11	2	3	2						20
合計	3	37	6	12	31	5	1	1	8	3	107

土器

産地\器種	湯通し	匣鉢	合計
不明	1	1	2
合計	1	1	2

瓦

産地\器種	軒瓦	棧瓦	平瓦	不明	合計
越前		2	1	1	4
不明	1				1
合計	1	2	1	1	5

ガラス

産地\器種	蓋	瓶	合計
不明	1	1	2
合計	1	1	2

金属

産地\器種	煙管	合計
不明	1	1
合計	1	1

古銭

産地\種別	銅銭	合計
中国（北宋）	1	1
中国（明）	1	1
日本	4	4
合計	6	6

合計

地点\種別	陶器	磁器	土器	瓦	ガラス	金属	古銭	合計
鷗島沖海底	32	107	2	5	2	1	6	155

表 2 鷗島沖の海揚げり遺物 観察表

No.	種類	器種	口径	底径	器高	成形・装飾技法	生産地	製作年代	備考
1	磁器	小坏	(6.3)	2.4	3.3	ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
2	磁器	小坏	(5.4)	(2.5)	2.7	ロクロ成形／染付	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
3	磁器	小坏	(7.4)	(3.6)	4.6	ロクロ成形／コバルト染付 面取り	瀬戸・美濃	19c中葉～後葉	
4	陶器	小碗		4.2		ロクロ成形／灰釉 高台脇から外底部にかけて露胎	萩	18c～19c	
5	陶器	小坏	(8.6)	(4.0)	4.0	ロクロ成形／灰釉 鉄絵	不明	19c	
6	陶器	小碗		4.3		ロクロ成形／透明釉 呉器手刷	肥前	17c後半～18c前半	
7	磁器	小碗				ロクロ成形／染付 コンニャク印判松竹梅文	肥前	18c	
8	磁器	小碗		4.0		ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文	肥前	18c後半	
9	磁器	小碗				ロクロ成形／染付	肥前	18c後半	
10	磁器	小碗	10.2	3.8	5.8	ロクロ成形／染付 梅樹文	肥前	18c後半	
11	磁器	小碗	7.4	3.5	6.5	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花、外面笹文、折松葉文、内面口縁部四方櫛、筒型碗	肥前	18c後半	
12	磁器	小碗	(8.9)	4.4	6.3	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、外面丸文散らし、内面口縁部四方櫛、筒型碗	肥前	18c後半	
13	磁器	小碗		5.7		ロクロ成形／染付 笹文 見込み寿字文、広東碗	肥前	18c後半～19c初頭	
14	磁器	小碗	(10.5)	3.8	5.6	ロクロ成形／染付 牡丹唐草文、見込み松竹梅文、口縁部雷文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
15	磁器	小碗		4.0		ロクロ成形／染付 見込み松竹梅文くずれ	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
16	磁器	小碗	(9.8)			ロクロ成形／染付 花卉文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
17	磁器	小碗	(8.6)			ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
18	磁器	小碗				ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
19	磁器	小碗	10.8	4.0	5.5	ロクロ成形／染付 見込み「成化年製」銘、十草文、口縁部雷文	瀬戸・美濃	19c中葉	
20	磁器	小碗	10.4	4.2	6.1	ロクロ成形／染付 漢詩文	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
21	磁器	小碗		3.7		ロクロ成形／染付 見込み寿字文くずれ	肥前・肥前系	19c中葉	
22	磁器	小碗	10.8	4.4	5.8	ロクロ成形／染付 窓絵網目文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
23	磁器	小碗	10.6	3.8	5.9	ロクロ成形／染付 山水文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
24	磁器	小碗	10.8			ロクロ成形／染付 みじん唐草文くずれ	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
25	磁器	小碗	9.8			ロクロ成形／染付 笹文	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
26	磁器	小碗				ロクロ成形／染付 紅葉文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
27	磁器	小碗				ロクロ成形／染付	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
28	磁器	小碗		4.4		ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
29	磁器	小碗		4.0		ロクロ成形／染付	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
30	磁器	小碗	11.0			ロクロ成形／染付 桐文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
31	磁器	小碗				ロクロ成形／染付	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
32	磁器	小碗	11.2			ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
33	磁器	碗蓋	9.2	3.6	2.9	ロクロ成形／染付 寿字文、鳳凰文、見込み松竹梅文、内面口縁部雷文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	完形品
34	磁器	碗蓋	8.8	3.8	2.7	ロクロ成形／染付 草花文、見込み蝶文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
35	磁器	碗蓋	9.4	3.6	2.7	ロクロ成形／染付 花蝶文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
36	磁器	碗蓋		3.4		ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
37	磁器	碗蓋	(10.4)	4.4	2.7	ロクロ成形／染付 花卉文	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
38	磁器	小碗	10.8	3.9	6.0	ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り みじん唐草文、窓絵花鳥文、見込み松竹梅文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
39	磁器	小碗	9.2	3.7	5.6	ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り みじん唐草文、团扇文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
40	磁器	小碗	11.0			ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り みじん唐草文、窓絵文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
41	磁器	小碗		3.8		ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り みじん唐草文、窓絵文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
42	磁器	小碗		3.8		ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
43	磁器	小碗		4.1		ロクロ成形／コバルト染付 半割菊花文、見込み寿字文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
44	磁器	碗蓋	4.0			ロクロ成形／コバルト染付 見込み松竹梅文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
45	磁器	小碗		4.4		ロクロ成形／染付 七宝文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
46	磁器	小碗	11.6	4.0	5.3	ロクロ成形／コバルト染付 釉下彩(緑) 銅版転写 寿字文、大極文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
47	磁器	小碗	11.6	4.6	4.9	ロクロ成形／釉下彩(緑) 銅版転写 菊に蓋文、内外面口縁部に瑠璃釉	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
48	磁器	小碗	4.0			ロクロ成形／染付 型紙摺り 梅樹文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
49	磁器	小碗	11.1	4.4	5.6	ロクロ成形／釉下彩(黒) 梅樹文	瀬戸・美濃	20c	
50	陶器	小皿	13.8	4.2	3.3	ロクロ成形／灰釉 見込み蛇ノ目釉剥ぎ、砂目積み	肥前	17c前半	
51	陶器	小皿	12.5	4.8	3.6	ロクロ成形／内面銅緑釉、外面透明釉 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	17c後半～18c前半	内野山窯
52	陶器	小皿	11.8	4.6	3.9	ロクロ成形／内面銅緑釉、外面透明釉 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	17c後半～18c前半	内野山窯
53	磁器	小皿	11.6	4.2	3.5	ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
54	磁器	小皿	11.9	4.2	4.1	ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	完形品
55	磁器	小皿	12.1	3.7	3.4	ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
56	磁器	小皿	12.3	(4.4)	3.5	ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
57	磁器	小皿	(11.5)	(3.8)	3.5	ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
58	磁器	小皿	(12.4)			ロクロ成形／染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
59	磁器	小皿				ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
60	磁器	深皿				ロクロ成形／染付 蛸唐草文	肥前・肥前系	18c後半～19c前半	
61	磁器	深皿	14.0	7.4	2.8	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、鳶唐草文、見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	18c後半	
62	磁器	深皿		(8.6)		ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、見込み蛇ノ目釉剥ぎ	肥前	18c後半	
63	磁器	深皿	13.7	7.9	4.1	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、笹文、外面唐草文、高台内「満福」銘	肥前	18c後半	完形品
64	磁器	深皿	(14.2)	(8.8)	5.0	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、高台内「満福」銘	肥前	18c後半	
65	磁器	深皿	(13.0)	(9.4)	4.2	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文	肥前	18c後半	
66	磁器	深皿	(13.2)	(7.6)	3.3	ロクロ成形／染付 コンニャク印判五弁花文、高台内「満福」銘	肥前	18c後半	
67	磁器	深皿			4.1	ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
68	磁器	小皿	10.0	5.8	3.0	ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
69	磁器	深皿	(13.8)	8.6	4.8	ロクロ型打ち成形／染付 みじん唐草文、松竹梅文、高台内「成化年製」銘	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
70	磁器	深皿	(13.3)	7.3	3.7	ロクロ型打ち成形／白磁 蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
71	磁器	深皿	14.0	8.1	3.7	ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文、内面口縁部雷文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
72	磁器	深皿	(14.2)	8.6	4.1	ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
73	磁器	深皿	(13.4)	7.8	4.9	ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
74	磁器	深皿	(13.8)	6.7	3.9	ロクロ型打ち成形／染付 帆掛け舟文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
75	磁器	深皿		8.1		ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
76	磁器	深皿			4.5	ロクロ型打ち成形／染付 家屋山水文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
77	磁器	深皿	13.6	8.5	4.2	ロクロ成形／染付 亀甲繫ぎ文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
78	磁器	深皿	(13.8)	9.8	3.4	ロクロ成形／染付 吹墨、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	

No.	種類	器種	口径	底径	器高	成形・装飾技法	生産地	製作年代	備考
79	磁器	深皿	(13.8)	8.6	4.2	ロクロ成形／染付 草花文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
80	磁器	深皿		(8.4)		ロクロ成形／染付 二重綱目文、見込み蛇ノ目軸剥ぎ、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
81	磁器	深皿	13.4	8.0	4.0	ロクロ型打ち成形／染付 花蝶文、内面口縁部雷文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
82	磁器	深皿	(14.0)	(9.0)	4.0	ロクロ成形／染付 雪持ち笹文カ、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
83	磁器	深皿	(14.0)	(8.4)	3.5	ロクロ成形／染付 笹文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
84	磁器	深皿				ロクロ型打ち成形／染付 口鏽	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
85	磁器	深皿				ロクロ型打ち成形／染付 口鏽	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
86	磁器	中皿	(24.2)	(13.4)	4.4	ロクロ型打ち成形／青磁染付 窓絵・楼閣山水文、地文は花唐草に青海波、内面墨弾き雷文、高台脇連弁文、高台内「瑞」崩れ銘、焼継ぎ痕あり	肥前	19c中葉	
87	磁器	中皿		(17.4)		ロクロ成形／染付 芝垣文カ、高台内ハリ支え痕	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
88	磁器	中皿	22.4	12.6	3.1	ロクロ型打ち成形／染付 楼閣山水文、高台内ハリ支え痕	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
89	磁器	中皿		(12.4)		ロクロ成形／染付 松樹文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
90	磁器	深皿	14.8	8.6	4.1	ロクロ型打ち成形／コバルト染付 楼閣山水文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
91	磁器	深皿				ロクロ成形／コバルト染付	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
92	磁器	深皿	14.6	8.7	4.7	ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、桜散らし文、見込み松竹梅文、外面唐草文、蛇の目凹型高台、高台内「四十二マ」墨書あり	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
93	磁器	深皿	(14.4)	8.2	3.9	ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、窓絵、外面草花文、蛇の目凹型高台	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
94	磁器	小皿	(14.6)	7.8	4.0	ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、窓絵、外面唐草文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
95	磁器	深皿				ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、草花文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
96	磁器	深皿				ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、みじん唐草文、外面菊花文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
97	磁器	深皿	(13.0)	(8.0)	2.8	ロクロ型打ち成形／コバルト染付 型紙摺り、魚々子文、外面花唐草文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
98	磁器	小皿	(11.0)	(6.8)	1.8	ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り、宝尽くし文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
99	磁器	角皿				ロクロ型打ち成形カ／コバルト染付 素描	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
100	磁器	小皿	10.6	3.1	2.2	ロクロ成形／コバルト染付 銅版転写 捺り文	瀬戸・美濃	1870～20c前葉	
101	磁器	深皿カ				ロクロ型打ち成形／コバルト染付 銅版転写 松笠文	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
102	磁器	中皿		(17.8)		ロクロ成形／コバルト染付・釉下彩(緑) 銅版転写 鯉文、二重高台	肥前・肥前系	1870～20c前葉	
103	磁器	小鉢	(18.4)			ロクロ成形／染付 環瑤文	肥前・肥前系	19c前葉～中葉	
104	陶器	播鉢		11.3		ロクロ成形／無釉	珠洲	14c末葉～15c中葉	
105	陶器	播鉢				ロクロ成形／鉄釉	須佐唐津	18c	
106	陶器	播鉢				ロクロ成形／鉄釉	上野・高取系	19c前葉～中葉	
107	陶器	播鉢				ロクロ成形／鉄釉	肥前	19c	
108	陶器	播鉢	(30.0)	(14.6)	13.2	ロクロ成形／鉄釉	上野・高取系	19c前葉～中葉	
109	陶器	播鉢	(33.3)	13.8	11.9	ロクロ成形／鉄釉	瀬戸・美濃	19c前葉～中葉	
110	陶器	甕カ	(23.4)			摩滅が著しい	不明	不明	
111	陶器	中甕				ロクロ成形／鉄釉	上野・高取系	19世紀中葉	
112	陶器	中甕				ロクロ成形／鉄釉	上野・高取系	19世紀中葉	
113	磁器	德利	3.3			ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
114	磁器	德利	4.5			ロクロ成形／染付カ	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
115	磁器	德利				ロクロ成形／染付カ	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
116	磁器	德利				ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
117	磁器	德利				ロクロ成形／染付 窓絵	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
118	磁器	德利				ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
119	磁器	德利				ロクロ成形／染付カ	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
120	磁器	德利				ロクロ成形／染付	肥前・肥前系	19世紀前葉～中葉	
121	陶器	德利	3.8			ロクロ成形／藁灰釉	越後	19世紀中葉～後葉	
122	陶器	德利	4.4			ロクロ成形／藁灰釉	越後	19世紀中葉～後葉	
123	陶器	德利	4.8			ロクロ成形／藁灰釉	越後	19世紀中葉～後葉	
124	陶器	德利				ロクロ成形／藁灰釉	越後	19世紀中葉～後葉	
125	陶器	德利		6.8		ロクロ成形／藁灰釉	越後	19世紀中葉～後葉	
126	陶器	德利		6.0		ロクロ成形／鉄釉 高台脇に「〇」に「カ」の刻印あり	越後	19世紀中葉～後葉	
127	陶器	德利		6.6		ロクロ成形／鉄釉 高台脇に「〇」に「キ」の刻印あり	越後	19世紀中葉～後葉	
128	陶器	德利				ロクロ成形／鉄釉	越後	19世紀中葉～後葉	
129	陶器	德利				ロクロ成形／鉄釉	不明	19c	
130	陶器	德利				ロクロ成形／鉄釉	不明	19c	
131	陶器	德利		8.6		ロクロ成形／鉄釉	不明	19c	
132	磁器	鉢子				ロクロ成形／染付 折り鶴文	不明	19c	
133	磁器	鉢子				ロクロ成形／コバルト染付 花卉文カ	不明	19c	
134	磁器	鉢子				ロクロ成形／コバルト染付 型紙摺り、鶴文	不明	19c	
135	陶器	鉢子				ロクロ成形／灰釉	不明	19c以降	
136	陶器	鉢子	4.7			ロクロ成形／灰釉	不明	19c以降	
137	陶器	土瓶				ロクロ成形／透明釉	関西系	19c	
138	陶器	土瓶カ				ロクロ成形／鉄釉	不明	19c	
139	陶器	灯明皿				ロクロ成形／灰釉	関西系	19c	
140	土器	湯通し	15.1	8.3	9.8	ロクロ成形／無釉	不明	19c	
141	土器	匣鉢		(18.2)		ロクロ成形／無釉 摩滅が著しい	不明	不明	
142	瓦	軒瓦				燻瓦	不明	19c	
143	瓦	不明				施釉瓦／鉄釉	越前	19c	
144	瓦	棧瓦				施釉瓦／鉄釉	越前	19c	
145	瓦	棧瓦				施釉瓦／鉄釉	越前	19c	
146	瓦	平瓦				施釉瓦／鉄釉	越前	19c	
147	ガラス	栓				「いづみ」銘あり	不明	19c中葉以降	
148	ガラス	瓶	6.2				不明	19c中葉以降	
149	銅	煙管					不明	18c後半	
150	古銭	咸平元寶				字体真書	中国(北宋)	998年初鑄	
151	古銭	洪武通寶				背面右「一銭」	中国(明)	1368年初鑄	
152	古銭	寛永通寶				古寛永通寶	寛永13年(1636)～明暦2年(1656)		
153	古銭	寛永通寶				古寛永通寶	寛永13年(1636)～明暦2年(1656)		
154	古銭	寛永通寶				新寛永通寶、四文銭、背面「二十一波」	明暦2年(1656)～明治初頭		
155	古銭	寛永通寶				新寛永通寶	明暦2年(1656)～明治初頭		